

# 市長となめがた大使まちづくりを より良いまちづくりを していきために



## プロサッカー選手 小澤英明さん

2012年9月2日委嘱。旧北浦町津澄地区出身。津澄小学校、北浦中学校、水戸短大付属高等学校(現水戸啓明高等学校)卒業。1992年、鹿島アントラーズに入団。その後、横浜F・マリノス、アルビレックス新潟などに移籍。2010年には、パラグアイのスルティボ・ルケニョと契約を交し、子供の頃からの夢だった海外でのプレーを実現。

## 作家(著述業) 小林光恵さん

2011年9月2日委嘱。旧玉造町玉造甲地区出身。玉造中学校、鉢田第一高等学校卒業後、東京警察病院看護学校卒業。看護師として東京警察病院、茨城県日赤血液センターなど勤務後に編集者として出版社に勤務。その後、独立し看護経験を活かしたエッセイや小説を執筆。漫画「おたんこナース」やドラマ「ナースマン」の原作者。

市長：今回、はじめて大使のお二人にお会いすることができ、とてもうれしく思います。市外から故郷を見つめていただいているお二人にお話を聞かせていただき、まちづくりを進めていく上で参考にしていきたいと考えておりますので、よろしくお願いします。

## ♪ 故郷への思い出

市長：お二人とも行方市の出身でいらっしゃいますが、学生時代の思い出などあれば教えてください。

小澤：中学を卒業するまで北浦地区に住んでいました。小学校4年生のときにサッカーと出会い、サッカー漬けの毎日でしたが、北浦で泳いだり、山の中に入つてカブトムシを捕りました。夕方にはホタルをたくさん見かけたことをはつきりおぼえています。

小林：私は玉造小学校に通っていました。その高台から見える霞ヶ浦は、子どものときから印象に残っています。

## ♪ 現在の活動

市長：小林さんは、漫画「おたんこナース」やドラマ「ナースマン」の原作者であり、数々のエッセイや小説を執筆されています。また、先日は、小林さんの母校でもある鉢田一高でご講演をされるなど、全国各地で精力的に保

健医療分野のメッセージを発信されていることも伺いました。現在、執筆されている内容につきまして、その一端で結構ですので、お話しいただけませんか？また、先日の鉢田一高のご講演ではどのようなことをお話しになつたのでしょうか？

小林：看護系の紙媒体やウェブ上の媒体で月刊6本ほど連載をしています。企画段階の書き下ろしとしまして、お盆や暮れに実家に帰つてくる「帰省」について本にしたいと思い、取材をすすめています。鉢田一高で講演するなんて思つてもいませんでした。いろいろな人と出会い、出会つたことの記憶が人生を支えていくということを話しました。

市長：小澤さんは、プロサッカー選手として国内外でプレーされました。また、今年度は、市内の小学校を訪問され、サッカーを通じた交流事業に取り組まれ、児童たちも大変喜んでおりました。ここ最近小澤さんが取り組まれている活動についてお聞かせください。

小澤：『フットボール・シン・テーラーズ』。スペイン語で『フットボールには国境はない』をテーマに様々な活動をしています。パラグアイでプレーをしていた時期に、小さな子どもたちが交差点などでガムやキャンディなどを

売りながら、家計の足しにしていました。日本ではなかなか見られない環境に触れ、自分の口で日本の子どもたちに伝えたいという思いが高まりました。

## ♪行方市の少子高齢化への提言

**市長**・行方市は若年層の人口流失や出生数も年々減ってきており、まちづくりを進めている上で、人口減少はマイナス要因です。人口を増やすためには、どのような取り組みが必要と思しますか？

**小林**・少子高齢化は、人類で初めての体験だといわれています。未知のことなので混乱している部分があると思います。初めてということで今までの概念にとらわれない企画アイデアなどを取り組んでいく必要がある

のではないでしょうか。「コンパクトシティ」という考え方は私自身も感じていて、行方市に住んでいる友達と待ち合わせをしようとするとお店が見つかりません。カフェなり喫茶店なりファミレス、カラオケボックスなど、行方市内に友達と気軽に会える場所がもつとあればよいなあと感じています。私は、学会に参加することもありますが、学会などの年次総会は、多くの人が集まっています。そのためには地元の人も動きます。それらの人々を受け入れられるような場所を整備する必要があります。行方市は東京にも近いですし、環境や自然条件もそろっています。

**市長**・洞爺湖サミットも景色のよい場所で開催されましたが、一大イベントということで人も動きますし、人が動くということは地元の産業も動くことにつながります。

**小澤**さんは、海外にも行かれていますが、そのような視点でいかがですか？

**小澤**・日本人の選手や海外の選手とプレーするということは、いろいろな障害があります。それを障害と感じずにはいられるのは、行方市で培った人間としての生き方や物の考え方、人とのふれあいの仕方などの郷土愛とか家族愛といった絆が、自分の財産になつて

いて、それがプロスポーツ選手として続けていくことができたと感じています。今の時代の流れの中で、外に発信することも大事なことです。そこに住んでいる人が郷土愛をさらに強くすると、外にいる人たちも、魅力的なものが膨らんできます。また、行方市でサッカーなどの大きなスポーツイベントを開催し、強豪チームを呼ぶなどして、全部を行方市のスタッフで受け入れるとすれば地元の人たちもやりがいを感じますし、大会をとおして知名度やブランドが高まっていくと、魅力的な部分がより増していくのではないかでしょうか。

**市長**・お二人が各地で行方市をPRしていくだいていることは市民の皆さんも感謝していることだと思います。私もできる限り努力をして行方市を盛り上げいく所存ですので、小林さんともご協力を願いできればと思います。本日は誠にありがとうございました。

## ♪小林さんと小澤さんから小・中学生の皆さんへのメッセージをいただきました

**小林**・つらいニュースや暗いニュースが多くて先への不安を感じている人が多いと思います。小学生、中学生になつて

いて、それがプロスポーツ選手として続けていくことができたと感じています。子どものときが最もつらいのですが、子どもとの絆が最もつらいのです。子供のときが最もつらいのであつて、先々、絶対によいことがあります。

**小澤**・プロになりたいという気持ちが強くて小学校の卒業文集にその思いを残しました。当時、プロになるためには海外に行くしかありませんでしたが、その後、Jリーグが誕生しました。夢がかなつて鹿島アントラーズに入団し、それ以降プロとしてやっています。皆さんも自分の夢・目標に向かっていきます。皆さんも自分の夢・目標に向かっていきます。皆さんは夢はかないます。強い思いを持ちながら日々の生活を過ごしてください。



小澤 英明さん